

解題

西部 忠

本書は、ハイエクのポリテイカル・エコノミーの方法論と哲学の変遷を、批判的実在論の見地から主題的に論じた研究書である。批判的実在論については、すでにその代表的論者であるトニー・ローソンの主著 (Tony Lawson, *Economics and Reality*, London: Routledge, 1997) が『経済学と実在』(八木紀一郎監訳／江頭進・葛城政明訳、日本評論社、二〇〇三年)として邦訳刊行されたこともあり、その認知度がしだいに高まってきている。本書は、批判的実在論に基づく研究書として日本で二番目ということになるが、原著書の刊行ではローソンの著書に先行している。また、本書は、ハイエクの社会経済学の発展を、それを根底で支える哲学の変遷として跡づけるといふ経済思想史的なアプローチをとっているの、読者は、本書によって、批判的実在論が実際の学問研究においていかに活用されるのかをより具体的に理解できるのではないだろうか。

本書については、オーストリア学派の経済学者であるカレン・ヴォーン (Karen Vaughn) が、『エコノミック・ジャーナル』(*Economic Journal*, Vol. 107, No. 443, 1997) にかなり好意的な書評を書いている。また、もう一人の有力なオーストリア学派経済学者ノーマン・バリー (Norman Barry) の『インディペンデント・レビュー』(*The Independent Review*, Vol. 2, No. 2, 1997) に載った書評は、いくらかの批判を含むとはいえ、基本的に好意的なもので

ある。

なお、本書は一九九八年グンナー・ミュルダール賞を受賞した。これは、欧州進化政治経済学会 (European Association of Evolutionary Political Economy) によりその年の最優秀図書に贈られるものである。

一 著者のプロフィール

著者のステイヴ・フリートウッドは、一九五五年リヴァプールに生まれた。二〇代に自転車レーサーになる道を選び、一九七〇年代後半から冬に生活費を稼ぎながら夏にアマチュアとセミプロとして試合に出場するという生活を続け、一九八二〜八七年にはプロとして英国とヨーロッパのレースの第一線で活躍、その後、自転車レーサーを引退してからアカデミックな世界に転身したというユニークな経歴をもつ。ケンブリッジ大学経済学部でトニー・ローソンの指導を受け、本書へと発展した博士論文によって一九九三年に博士号を取得した。その後、ドゥ・モンフォート大学講師を経て、一九九九年よりランカスター大学マネジメントスクール組織労働技術学部で上級講師 (Senior Lecturer) を務めている。なお、英国における上級講師とは米国の assistant professor にほぼ相当するので、日本でなら助教授にあたるであろう。

フリートウッドの主要な著作を紹介すると、単著である本書のほか、単編著として、

S. Fleetwood (ed.), *Critical Realism in Economics: Development and Debate*, London: Routledge, 1999

また、共編著として、

S. Fleetwood and S. Ackroyd (eds), *Critical Realist Applications in Organisation and Management Studies*, London:

Routledge, 2004

S. Fleetwood, A. Brown, and J. Roberts (eds), *Critical Realism and Marxism*, London: Routledge, 2002

S. Fleetwood and S. Ackroyd (eds), *Realist Perspectives on Organisation and Management*, London: Routledge, 2000

の計四冊を刊行している。また、以下の各本にフレイジャー付ジャーナル論文がある。

‘An Evaluation of Causal Holism’, *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 26, No. 1 (2002), pp. 27-45

‘Causal Laws, Functional Relations and Tendencies’, *Review of Political Economy*, Vol. 13, No. 2 (2001), pp. 201-220

‘Conceptualising Unemployment in a Period of Atypical Employment: A Critical Realist Analysis’, *Review of Social Economics*, Vol. LIX, No. 1 (2001), pp. 211-220, reprinted in P. Downward (ed.), *Applied Economics and the Critical Realist Critique*, London: Routledge, 2003

‘What Kind of Theory is Marx’s Labour Theory of Value? A Critical Realist Inquiry’, *Capital & Class*, Issue 73 (2001), pp. 41-77, reprinted in A. Brown, S. Fleetwood, and J. Roberts, *Critical Realism and Marxism*, London: Routledge, 2002

‘The Inadequacy of Mainstream Theories of Trade Unions’, *Labour*, Vol. 13, No. 2 (1999), pp. 445-80.

‘Aristotle’s Political Economy in the 21st Century’, *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 21, No. 6 (1997), pp. 729-44

‘Order Without Equilibrium: A Critical Realist Interpretation of Hayek’s Notion of Spontaneous Order’, *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 20, No. 6 (1996), pp. 729-47.

日本語版への序文にもあるように、フリートウッドの知的関心は、現在、労働・雇用問題にあり、制度派や新古典派に取って替わりうるような、労働市場の制度論的説明を非実証主義的なアプローチによって展開している。労働経済学、労働の社会学、産業雇用関係、組織分析、人的資源経営といった各分野間の垣根を取り払う学際的研究

を進めることで、労働雇用研究を統一しようと試みている。

二 本書の特徴

本書の特徴は、

- (1) ハイエク哲学の転換（三期に及ぶ）による社会経済秩序像の発展の解明
 - (2) 知識・無知とルールのさまざまな種類と相互関連に関する深い洞察
 - (3) 批判的实在論哲学のハイエク研究への適用
- の三つにまとめることができる。以下、順番に解説することとしたい。

(1) ハイエク哲学の転換（三期に及ぶ）による社会経済秩序像の発展の解明

本書は、ハイエクの著作を三期に分け、経済学、法学、政治学、社会学、心理学など社会・人文科学の諸分野にまたがる社会経済学の発展を、それを根底で支えるハイエクの哲学の変遷から説明したものである。従来のハイエクの転換問題を内在的に批判・検討し、これを彼の存在論の転換から再解釈する一方で、ハイエクⅢや自生的・変換的秩序概念などを導入した点に本書の第一の特徴がある。ステイヴ・フリートウッドによると、ハイエクは自らの哲学、とくに、分析対象の性質を主題とする存在論を二度変更した一九六〇年以降、知識やルールに対してその他の事象や経験とは異なる存在論上の地位を与えることによって、自生的な経済社会秩序像を提示しえたのである。

本書への書評でノーマン・バリイは、本書がハイエク経済学の哲学面という「狭い局面に集中することによって」、ハイエク思想の系譜的理解において「新たな何か」を提示したと述べている。この「新たな何か」は、フリートウッドがハイエクの転換の全過程を首尾一貫した視点から説明し、その帰結としてハイエクの社会経済像が備えることになる全体性や包括性を明らかにした点にある、と言えるのではないか。そして、このことは同時にハイエク像の見直しを含む。

これまで日本のメディアや論壇などでは、ハイエクは伝統的保守主義ないし自由主義を擁護する思想家として喧伝されることが多かった。また、学界では、彼の景気理論、貨幣理論、自生的秩序論、社会主義・福祉国家批判など特定の主題が個々に取り上げられる傾向にあった。それらはいずれも思想、哲学、法学、政治学、経済学など、ハイエクが取り組んださまざまな領域や分野に光を当てるものではある。しかし、これではハイエクの全体像はなかなか浮かび上がってこない。

これに対して、本書においてハイエクは、哲学的転換を繰り返しながら世界の实在性にしだいに迫ってゆき、一九六〇年以降、知識やルールを深層領域にある科学的対象として新たに再定義することで、総合的な社会経済論を創始する、いわば学融合的な社会学者として描かれている。この点で、本書は従来にない首尾一貫したハイエク像を提示することに成功している。

ただし、フリードウッドが一九六〇年以降のハイエクⅢの準批判的实在論を適切な立場であると考えているためか、それ以前のハイエクⅠやⅡにおける経済学的研究の具体的内容に関する検討が十分ではないという印象が残る。とくに、ハイエクⅠが貨幣的景気理論から出発して、経済計算論争でミーゼスの立論を引き継ぎ社会主義経済の存在可能性を否定する論拠、あるいは、ハイエクⅡが経済計算論争で市場社会主義論とともに一般均衡理論を批判する論拠については、そう思われる。たとえば、市場を知識の「情報伝達機構」と捉える視点（「経済学と知識」一

九三六年、「社会における知識の利用」(一九四五年)と、ライバル的競争(Combat)を知識の発見過程や発見手続きと見る視点(「競争の意味」一九四六年、「発見的手続きとしての競争」一九六七年)の間には一般均衡理論批判として大きな違いがあるのであり、これらをハイエクⅡと括って両者を同一視するとすれば重要な論点を看過することになってしまう。

これは、ハイエクⅢを到達点と仮定するため、そこへいたる過程がいささか軽視されていることを示す例であるが、ここには目的論的な合理化が働いているとも考えられる。こうした問題があるにしても、フリートウッドによるハイエクの全体像の構成が崩れるものではなく、今後のハイエク研究における重要な参照枠になるであろう。

本書の考察対象はあくまでもハイエクの研究書や論文に限定されており、叙述スタイルも一貫して学術的である。それ以外の著作や自伝、インタビューを利用したり、言動上のエピソードを交えたりすることで、人物の全体像を立体的に、生き生きと描き出すようなアプローチは一切とられていない。その意味でゴールドウエルによるハイエクについての伝記的著作(Bruce Caldwell, *Hayek's Challenge*, Chicago: University of Chicago Press, 2004)とはまったく異質である。にもかかわらず、本書を読了すると、方法論という観点から統一的なハイエク像が明瞭に浮かび上がってくることに本書の魅力がある。

(2) 知識・無知とルールのさまざまな種類と相互関連に関する深い洞察

本書の第二の特徴は、いま述べたことにある程度含まれているが、哲学と方法論という視点から知識とルールという問題に接近し、それらについて広くかつ深い洞察を示した点にある。知識やルールに関する書物は甚にあふれているが、本書のようにその特異な存在論的性格に光を当てたものはほとんどない。パリーが言うように、哲学的議論は当初は「狭い局面」に思えるかもしれないが、しかし、そこから見渡すからこそ、知識とルールという広大な

な問題領域への独自の接近が可能になったのだとすれば、これは肯定的に捉えるべき特徴である。フリートウッドは、知識と無知を認識論ではなく存在論上の「深い」領域として把握し、それらとルールの関連を明確にしている。

まず、時間と費用をかければ克服できる常識的な無知と、未来についての不確実性に関わる克服不可能な根源的な無知は異なる。また、「である」という論述内容に関する知識(Knowing that)と「いかにして」という遂行方法に関する知識(Knowing how)も異なる。そして、時間と場所が特定された状況に関する分散化された知識についても、言語化可能な非暗黙的なものもあれば、言語化不可能な暗黙的なものもある。第7章によれば、ハイエクⅢは一九六〇年以降、これらの例における両者を明確に区別して、前者から後者へとしだいに焦点を移していった。

たとえば、ある商品がある店では安く売っているというような知識は、それを知ること、転売利益を得ることができるような知識であるが、言葉で伝達可能であるゆえ、前者に属する。これは現代オーストリア学派のカーズナーなどが注目するような無知である。カーズナーは、市場における競争を企業家たちがこうした常識的な無知を克服する過程であると考える。しかし、ハイエクの立場(少なくともハイエクⅢの立場)はこれとは異なる。

技能や熟練は一般に遂行方法に関する暗黙的な性質をもつが、こうした知識は、ハイエクの言う「情報伝達システム」(「価格メカニズム」としての狭い意味での「市場」)を通じて伝達されることはなく、むしろ、ふるまいの社会的ルールを通じてのみ伝達される。したがって、発見・伝達・貯蔵という知識に関わる全過程は、「情報伝達システム」だけでは達成されず、ふるまいの社会的ルールによって補完されなければならないのである。このように、局所的知識における暗黙知と非暗黙知の区別、および、法や契約などの公式的な一般的・抽象的ルールと非公式的なふるまいのルールの区別は、市場の働きを理解するうえで重要である。根源的な無知や不確実性は暗黙的・局所的な性質をもつ。根源的な無知や不確実性があるからこそ、ふるまいの社会的ルールが必要とされるという論点への着目の有無がハイエクⅡとハイエクⅢを画する。

このように、フリートウッドの知識とルールに関する考察は洞察と示唆に富むものであるが、そこに何の問題もないわけでもない。バリーは本書への書評で、「フリートウッドの優れた著作に対する私の主要な批判は次の点にある。すなわち、彼はハイエクが社会経済秩序を最終的に提示するにいたる道筋をみごとに表示したけれども、彼はハイエクが満足のゆく回答を与えたのかを問うていないことである」と書いている。バリーによるこの批判は有効であり、看過することはできない。シャックルやラックマンのような急進的主観主義者たちは、フリートウッドと同じく知識の分散性や暗黙性に着目しながらも、ハイエクが自由市場を調和的にのみ見ている点に批判的であり、カタラクシーの自生的秩序が「分岐する期待」のせいでもしろ自生的無秩序や非調整へ陥る危険性があることを、しばしば強調している。しかしながら、フリードウッドは本書を執筆した時点では、この問題にほとんど注意を払っていないようである。

この批判を意識したからだと思われるが、フリートウッドは日本語版への序文で「ハイエクのポリテイカル・エコノミー」を書いたとき、私はなんの批判も提出しなかった。というのも、私の目的はただハイエクの著作の理論的・方法的な基礎を理解することにあつたからである。もし今日、私がこの本を書くならば、あえていくつかの批判を試みているだろう」と述べている。そこでフリートウッドによる「ハイエク的思考のハイエクの批判」は、次の二点にまとめられる。①ハイエクが自由市場を擁護するのは、それに代わりうる代替案がないという消極的理由によるけれども、価格メカニズムやふるまいの社会的ルールで埋めえない空間には、社会的構造・制度上の自由度が存在するのであり、資本主義以外の社会経済システムが存立する可能性は依然として残されている、②ハイエクは企業内部の組織について何も語っていないものの、真の権限委譲は資本主義では達成不可能であり、その確立のためには他の社会経済体制が必要になるであろう。これら二つの論点は、本書の延長線上に位置づけられる「労働市場に対するユニークなアプローチ」に取り組む彼の現在の研究の重要な課題となっている。彼はこれにつ

いて、ハイエクとは真つ向から対立するかに見えるマルクスの議論をも取り入れている。本書でフリートウッドは、ハイエクの自生的秩序をどちらかといえば調和的に論じたけれども、ハイエクの自由市場や資本主義に対する礼賛をそのまま受け入れたわけではなく、むしろそれらを批判するために、まずは「ハイエクの著作の理論的・方法的な基礎を理解する」ことに専念したのだといえよう。

ちなみに、本書では「telecommunication system」を「情報伝達システム」と訳している。この言葉は現在、「テレコミュニケーション」「テレコム」のように日常的に使われ、主に、「電気通信」や「遠隔通信」の意味をもっている。「通信」を「各種形態で情報を伝達することである」と考えれば、これを「情報伝達システム」としてよいだろうと判断したからである。

私見によれば、ハイエクにとつての「情報伝達システム」とは、価格システム（狭い意味での「市場」）とほぼ同義であり、一般均衡理論者であるランゲが価格システム（狭い意味での「市場」）を「コンピュータ」||「計算機械」とたとえたこととの対比において理解すべきである。つまり、ハイエクの考える市場は、「計算」ではなくむしろ「情報伝達」「通信」を強調するという点で、相互に離れている諸主体が価格を含む情報を伝達し合い、相互に行動を調整してゆく分散的プロセスの集合体やネットワークを表しているのである。情報やシグナルは不完全であり、主体はそれだけを見て自分の行動を決めることはできない。このように、ハイエクの市場はあくまで「コミュニケーション」を主軸にするものであり、「コンピュータ」としての市場ではない。計算プロセスには計算結果という最終目的があるが、コミュニケーション・プロセスにはそうした終わりがない。このようにハイエクⅢの見地から「情報伝達システム」としての市場を捉えるときにはじめて、その静態的安定性や調和性ではなくて、むしろ動態的変動や不確実性が注目されることになるのである。

(3) 批判的実在論哲学のハイエク研究への適用

本書は批判的実在論ないし超越論的実在論をハイエク研究に適用した初の著作であり、その点で、ハイエク研究書として特異な位置を占めている。これが第三の特徴である。

批判的実在論については本書にも詳しい説明があるので解説は省略するが、それは実在論的存在論を特徴とする哲学的立場もしくは方法論を意味する。バスカーが一九七〇年代の半ばに実証主義を基礎とする自然科学の哲学を批判して「超越論的実在論」を展開した。⁽²⁾一九八〇年代後半に、バスカーがこれを社会科学にも適用して、人間主体はその社会的活動を通じて社会構造を再生産し、変換するだけであるとすると「社会的活動の変換モデル (TMS A)」を提唱したが、さらに、トニー・ローソンたちがこれを経済学に導入して以後、社会構造が人間の批判的主体性に依存していることを明確にするため、「実在論」に付く形容詞は「超越論的 (transcendental)」から「批判的 (critical)」へ変えられ、「批判的実在論」と呼ばれるようになった。ローソンの『経済学と実在』第12章や本書の第6章は、両者の意味を次のように区別している。すなわち、「超越論的実在論」は科学哲学一般すなわち科学の一般理論を指し、「批判的実在論」は、社会科学の哲学すなわち社会的存在論についての特殊な社会理論を指すと。

一九九〇年代、ケンブリッジ大学では、ローソンを中心に批判的実在論グループが形成され、キングス・カレッジで毎週月曜夜にリアリスト・ワークショップが開催された。そこにクライヴ・ローソンやステイヴン・プラットンらの若手研究者が参加していた。本書の著者であるステイヴ・フリートウッドは、なかでもオピニオンリーダー的な存在であった。このワークショップはその後、ニューナム・カレッジに場所を移し、現在は CRASH (Center for Research in the Arts, Social Science and Humanities) で毎週月曜日に開催されている。とくに、一九九〇年代後半以降、このグループから多くの研究成果が発表されている。批判的実在論者による経済学研究書として最初に

邦訳されたのは、トニー・ローソンの『経済学と実在』であり、本書は二冊目だが、原書では本書のほうが二年早く出版されている。その意味で、本書は批判的実在論に基づく初の体系的な経済学研究書でもある。また、二〇〇三年にケンブリッジ大の教員と学生を中心メンバーとするケンブリッジ社会的存在論グループ (Cambridge Social Ontology Group) を結成し、社会的実在の性質と基本構造に関する体系的研究を行なっている。⁽³⁾

ハイエクは現代オーストリア学派の源流として、日本でもここ二〇年ほどの間に大いに注目されてきており、オーストリア学派の立場から書かれた研究書も出版されている。政治学や法学での研究に加え、経済学、経済学史、経済思想史におけるハイエク研究が近年進められ、経済理論としても貨幣的景気理論、社会主義経済計算論争、自生的秩序論、貨幣発行自由化論などのトピックが取り上げられている。ハイエクがいた英国や米国ではオーストリア学派の伝統は継承されており、ハイエク研究書も数多く出版されている。

すでに述べたように、本書は、ハイエクの哲学を主たる対象として、ハイエクの政治経済学的发展ないし進化を詳細に論述するものであり、そうした哲学上の議論が批判的実在論から行なわれているのが本書の独自な点である。通常、現代オーストリア学派の哲学は主観主義、解釈学的基础づけ主義、あるいは個人主義からなると考えられている。本書では、これらはハイエクⅠやⅡの特徴でしかなく、後のハイエクⅢはそうした立場を超越したと理解する。カレン・ヴォーンが書評で、本書はオーストリア学派的な主観主義に対する警鐘として受けとめるべきであると論評しているように、本書は、現代オーストリア学派の哲学的立場と鋭く対立している。オーストリア学派に属するハイエクの研究書を執筆したにもかかわらず、フリートウッドがオーストリア学派の経済学者であるとは通常みなされていないのは、この方法論上の問題提起のためであろう。

しかも、このような哲学ないし方法論の視点から経済学の理論を研究することは、新古典派に代表される正統派の伝統においてもまれである。これは、諸理論をその理論自体の論理整合性や意味内容ではなく、その存立基盤で

ある哲学や方法論から超越論的に吟味検討するメタ理論的な視点を明確にするのに役立つ。批判的実在論に基づくことによって、経験論的実在論、実証主義、数理主義を批判することができるだけでなく、実在論の考え方を全面的に否認するポストモダンリズムやポスト構造主義に見られる文化的相対主義にも陥らずに、分野横断的アプローチを行なうことが可能になる。しかし、超越論的実在論もしくは批判的実在論の議論を少し聞きかじった程度では、むしろそれ自身がある種の形而上学ではないのか、いったいこれが経済学の知見を実質的に増大させるのか、といった疑問を感じずにはいられないだろう。これはまさに、私が一九九六年ケンブリッジで在外研究を行ない、彼らの議論にはじめて接したときの印象でもある。しかし、私の場合、フリートウツドが研究対象としたハイエクだけではなく、彼のハイエクに関する議論の仕方にも興味を持っていた。私はその直前に上梓した『市場像の系譜学』（東洋経済新報社、一九九六年）のなかで、ハイエクに対して社会主義経済計算論争における他の論者との関連や彼の後の発展という視点から接近したが、ハイエクの哲学・方法論全般にいたるまで考察が及んでいなかった。フリートウツドがいかにハイエクを取り扱ったかに大きな関心を持ったのであった。

あとから考えてみると、それとは別の理由もあった。私は一九八〇年代以来、ポストモダンリズムやポスト構造主義の考え方を基本的に認めつつも、同時に、それへの疑問も根強く持ち続けていた。にもかかわらず、それらに取って代わりうる考え方も見いだしえないというような宙ぶり状態にあった。要するに、私のなかには、フリートウツドの議論の基盤となる批判的実在論の意義を了解するための下地がすでにあり、マイケル・ポランニー流にいうならば、それに対する「焦点的意識」が形成されていたのであった。私の場合、自分が研究したハイエクの社会経済学が批判的実在論の最初の適用例として偶然に与えられたのだから、かなり幸運であったといえる。

ハイエクは、一九二〇年代から三〇年代にかけての社会主義経済計算論争で、市場の計画による代替不可能性を主張した。だが、それと同じ時期に、経済理論として厳密に数理化されつつあった一般均衡理論が、社会主義経済の存立可能性を市場社会主義論というかたちで擁護していることに気づいたハイエクは、一般均衡理論自身の批判に向かった。そのときハイエクにとって必要だったのは、実質的な経済学の内容の変更ではなく、その哲学や方法論の転換でもあったはずである。

私自身は、そこで生じた転換の哲学的な意義について十分に考えていなかった。しかし、もしそれが単に認識論的なものであるとすれば、科学の客観性を批判する主観主義や解釈学的基础づけ主義にしかならないだろう。だが、ハイエクの転換はそれを越える意味をもっている。本書によれば、一九六〇年以降のハイエクⅢは、価格メカニズムとしての「情報伝達システム」だけでは自生的秩序は成立しないことに気づき、法のような公式的なルール、そしてさらに、非公式的なふるまいの社会的ルールによって補完されてはじめて市場経済が成立すると認識するようになった。そして、このような経済学的知見の進展は、ハイエクにおいて経験論的実在論から準超越論的実在論への哲学的転換を要求したのである。これは、たんに認識論上の転換ではなく存在論上の転換であって、知識やルールに対して、経験や事象を越える認識独立的な地位を与えることによって可能になったのだ、とフリートウツドは主張したわけである。

私にとってこの議論はきわめて新鮮であっただけでなく、説得的でもあった。本書を読み進むうちに、先に述べた批判的実在論への疑念がしだいに払拭され、最後には、その社会科学における意義を自分なりに理解できたのである。そのとき、批判的実在論は私にとって次のような重要な役割を果たしたのではなかったか。それはまず、主流派経済学が前提としながら明示的に意識化していない哲学と方法論、とくに、その存在論的基礎である経験論的実在論を批判し、そこから離脱するための「導きの糸」として機能した。しかし、それだけではない。それはまた、オーストリア学派やポストモダン哲学が陥りがちな主観主義、解釈学、表象主義に見られる存在論の軽視と認識論の偏重を是正するための「解毒剤」としても機能したのであった。批判的実在論の現代的意義は、この両面から理

解すべきであると考えられる。

注 記

- (1) 批判的実在論を論じた日本語文献として、石井潔「批判的実在論のプロブレマティク」『思想と現代』四〇号（一九九五年）、西部忠「レトリックとリアリズム」『批評空間』II-10（一九九六年）、佐々木憲介「批判的実在論の射程」星野富一・奥山忠信・石橋貞男編『資本主義の原理』（昭和堂、二〇〇〇年）、江頭進「トニー・ローソン」『21世紀のエコノミスト』（朝日新聞社、二〇〇一年）、トニー・ローソン（原伸子訳）『現代経済学再考の必要性について』『経済セミナー』五五九号（二〇〇一年）、江頭進「訳者解題」『経済学と実在』（日本評論社、二〇〇三年）、西部忠「書評『経済学と実在』」『季刊経済理論』四一巻一号（二〇〇四年）、西部忠「進化経済学の現在」『経済学の現在2』（日本経済評論社、二〇〇五年）などがある。
- (2) R. Bhaskar, *A Realist Theory of Science*, London: Verso, 1975.
- (3) 「ケンブリッジ社会的存在論グループ」のホームページは、<http://www.csog.group.cam.ac.uk/>にある。

訳者あとがき

本書の訳者三名は、一九九六年から、それぞれケンブリッジ大学で在外研究をする機会があった。ここでは、トニー・ローソンを座長に、毎週月曜日に批判的実在論のワークショップが開かれていた。このワークショップには、ケンブリッジの教員や大学院生だけでなく、他大学からの参加者や外国からの来訪者も多く出席していた。そして、批判的実在論固有の問題はもちろん、経済学方法論から実証研究にいたるまで、広範な問題が討論のテーマとされていた。大学が休みの期間中も、そのメンバーの幾人かは、定期的にバブに集まって議論をしていた。トニー・ローソンとともに、それらの集まりの中心にいたのが、本書の著者ステイヴ・フリートウッドであった。われわれ三名は在外研究を契機に、経済学方法論史、ハイエク研究、ジェンダー論など、それぞれの問題関心から批判的実在論を意識するようになり、彼らが日本の経済学研究においても無視できない論点を提出していると考えられるようになった。そこで、原の提案により、批判的実在論の立場からはじめての体系的な経済学研究書である本書の翻訳を、試みることにしたのである。

翻訳はまず、第1〜4章を佐々木、第5〜7章を原、第8〜10章および日本語版序文を西部が分担して訳稿をつくり、佐々木が全体の調整に当たるという方法で進めた。また、「解題」は西部が担当した。翻訳にさいしては、